



町内唯一の病院が果たしていく役割



天塩町立国民健康保険病院
放射線科 係長 津田 健志

1. はじめに

天塩町は北海道北西部、道内で2番目、国内では4番目の長さを誇る天塩川の河口に位置する、人口3,198人、世帯数1,575世帯と典型的な過疎の町です。今も天塩郡という行政区画があり、天塩山地・天塩平野の他に天塩〇〇といった地名も多く残っており、北海道の開拓当初からこの周辺地域の中心であったことをうかがわせる町です。現在は酪農業と漁業が主要産業で、明治の頃から「蝦夷の三絶」と謳われ珍重されてきた「天塩のしじみ貝」は粒が大きく濃厚な味で、今でも町の名産であり「しじみ貝」のブランド品となっています。

そして、太古の面影をいたるところに残し悠々と流れる天塩川。

その川の上中流域は、幻の魚「イトウ」の生息地です。「イトウ」は、国内最大級の淡水魚。半世紀ほど前は北海道内各地で生息していたと言われていますが、現在は天塩川など一部にしか生息していない絶滅危惧種に指定されている魚です。この幻の淡水魚「イトウ」に魅せられ、天塩町に移住してきた人もいます。

川の中流域にあたる名寄市付近から日本海に注ぐ河口まで、ダムやえん堤が無く、ノンストップで日本一長い157kmの川下りを楽しめます。季節によっては川下りの途中に様々な野鳥や鮭の遡上に遭遇することもあり、全国からカヌー愛好者がやってきます。

河口付近には100種以上の花が咲く国立公園のサロベツ原野が広

がり、天候に恵まれると日本海に浮かぶ利尻島の利尻富士を望むことが出来ます。

2. 病院の紹介

天塩町には、民間病院やクリニックが一つもないため、町立国保病院が、町に存在する唯一の病院です。

標榜科：整形外科・内科・外科・小児科・眼科・婦人科（眼科は月2回、小児科・婦人科は月1回の出張医対応）

病床数：48床（一般病床30床、介護療養病床18床）

常勤医：整形外科医1名、内科医1名（H29年12月まで）

1日平均外来患者数86名、1日平均入院患者数42名、病床利用率86.8%（平成28年度）



天塩町の位置：北緯44.9、東経141.8



天塩町の眼前に広がる日本海に浮かぶ利尻島の利尻富士

人工透析室 H24年開設。透析ベッド5床

現在、透析療法を受けている患者さんは9名で、うち半数は隣町から通院されています。町の透析室から地域の透析室になりつつあります。

病院理念：

- ・小規模多機能かかりつけ病院
- ・予防医療の実践
- ・老年医療への取り組み
- ・地域包括ケアから看取りまで

3. 放射線科の紹介

診療放射線技師1名

・救急医療：365日24時間受入れ体制です。救急時の放射線技師の呼出も行っていきます。

放射線検査の時間外検査：一般撮影とCT検査が主で、年間120人前後。

・Ai検査の受入れ：町内外の警察署からの依頼で、年間5件ほどCT検査を行っています。

<設置機器>

- ①一般撮影装置 島津メディカル RADSPEED pro (H29.9更新)
- ②CR装置 コニカミノルタ REGIUS MODEL210
- ③CT装置 東芝メディカル Alexion (3.5MHU仕様)
- ④X線TV装置 島津メディカル FLEXAVISION HB
- ⑤X線ポータブル装置 日立 Sirius 80N
- ⑥骨塩定量装置 日立 DCS-600EXV
- ⑦PACS コニカミノルタ I-PACS EX

⑧エコー装置 2台

Nemio MX 東芝メディカル
内科・婦人科用
HS-1 SNIABLE コニカミノルタ
在宅・整形外科用

4. 天塩町を取り巻く医療環境

① 救急搬送時の二次医療機関のある都市までの距離と移動時間（救急車ベース）

天塩町から

- ・稚内市 75km 1時間
- ・名寄市 120km 2時間
- ・旭川市 185km 3時間
- ・札幌市 280km 4時間

一番近い市立稚内病院の救急搬送でも1時間かかります。冬季の吹雪の中ではさらに30分以上かかります、このように二次医療機関に患者さんを搬送するのも容易ではありません。

※天候と時間帯が合えば、ドクターヘリを要請できる環境にはありません。

② 公共交通機関

公共交通機関は、本数の少ないバスのみです。75kmしか離れていない稚内市へ行くにも、稚内行き直通バスがないため、自家用車やライドシェアしなければ通院は不可能な環境にある町です。現在、ライドシェアの実証実験が行われています。

③ 町内の病院以外の医療・介護サービス

- ・特別養護老人ホーム50床
- ・ケアハウス15人
- ・訪問看護ステーション出張所
- ・デイサービス

・歯科医院 2施設

④ 町の世帯の特徴

高齢化率が37.7%と高いことを反映し、独居世帯・老老世帯・認認世帯（夫婦共に認知症の世帯）が多い状況です。毎年50人前後の町民の方が永眠されます。

5. 町民の“かかりつけ病院”として、放射線検査を行う立場から

<骨密度検査を例に>

H23年に設置した橈骨測定用のDXA装置で、現在、累計850名の女性（町外を受診者も含む）の検査を行いました。受診者数を人口比でみた場合、自治体の中でも骨密度検査の住民受診率は非常に高い町と言えます。（図1：町民女性の骨密度分布）

また、図2は、毎年、定期的に骨密度検査を受けている60代女性の結果表です。この方の骨密度は年々漸減傾向にあり、今後の定期受診の必要性を理解してもらうのに役立ちます。このように骨密度検査をひとつ大切にしていこうとしても、多くの町民に町立病院へ足を運び続けてもらうことにつながり、かかりつけ病院としての利用を促すきっかけになっています。

<北海道のへき地にある病院だからこそ出会う症例>

北海道の風土病 ～ エキノコックス症（多包虫症）

エキノコックス症は東日本、特に北海道に多く発生している疾患です。道内では毎年20名前後の患者さんが発見され、平成15年から

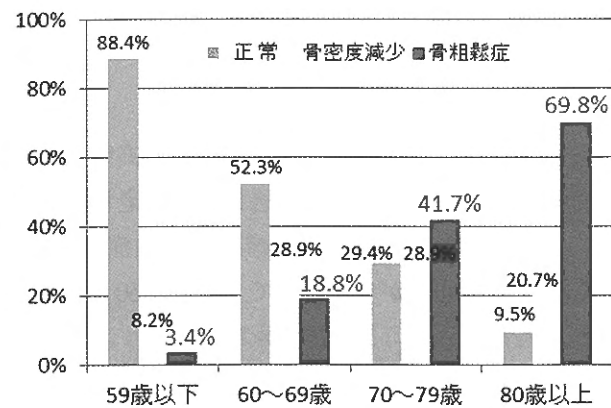


図1：町民女性の骨密度分布 (n=850)

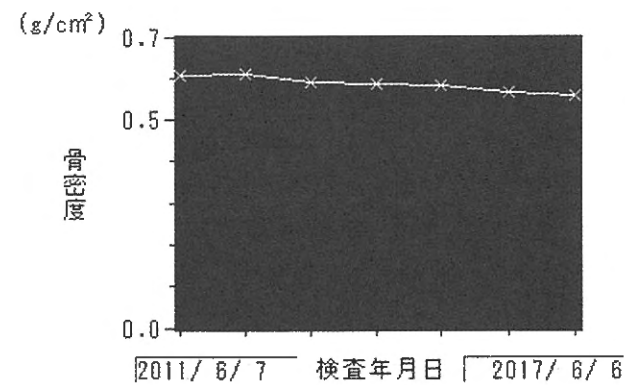


図2：60代女性の骨密度結果表

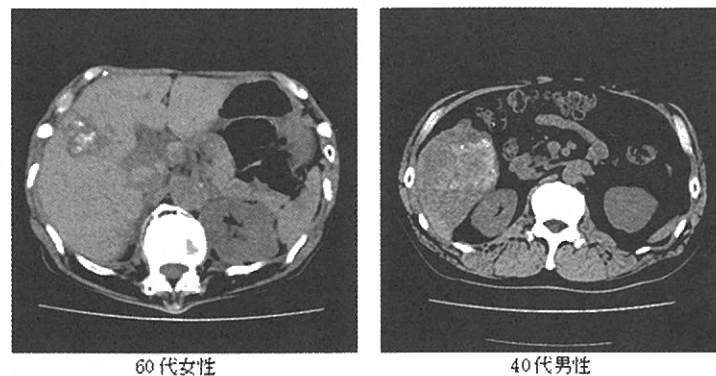


図3：当院の2症例

平成24年の10年間で193名を数えました。(北海道保健福祉部エキノコックス症に関するQ & Aより) 感染症法の取り扱いでは全数報告対象(4類感染症)に分類され、診断した医師は直ちに最寄りの保健所に届け出ることになっています。町内でエキノコックス検診を年1回行っていますが、当院では直近5年間で3例発見されていることもあり、それほど珍しい印象をもっていない疾患です。CT画像上では、石灰化を伴う嚢胞性病変が特徴的に観られます。(図3：当院の2症例)一般的には、血清検査のELISA法で抗体を検出し、二次検査のWestern blot法で確定診断をします。

6. 町の「老年医療」と「地域包括ケアから看取りまで」の取り組み

天塩町は、前述のとおり地理的位置や医療環境に弱点がある町です。しかし、弱点を認識した上で小さな町だからこそ出来ることがあるという発想で、「考えられる強み」から取り組んでいる「老年医療と地域包括ケアから看取りまで」をご紹介します。

<考えられる強み>

- ・町民の多くが当院をかかりつけ病院としているので、一人ひとりの患者さんが抱える病態の全体像を把握できる
- ・患者・スタッフがお互いに顔見知りなので、病状・家族構成・

生活状況などを医療スタッフ・施設・訪問看護・行政スタッフと情報共有できる環境にある

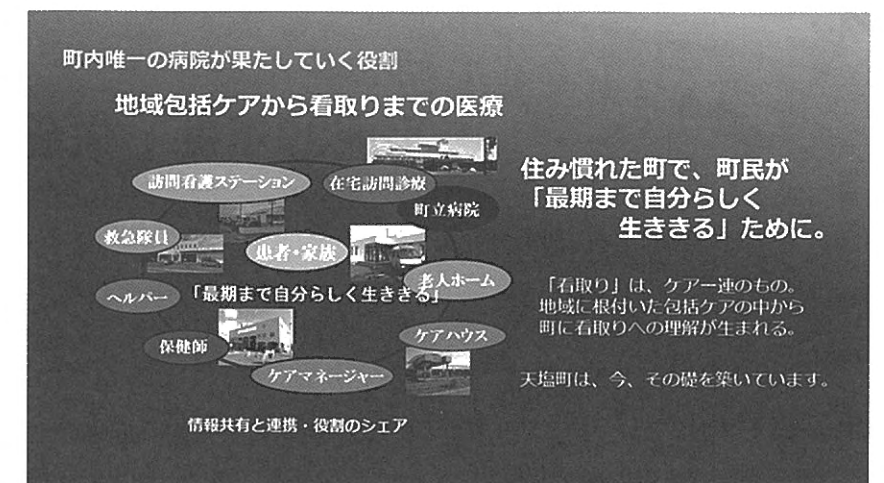
<老年医療と地域包括ケアから看取りまで>

高齢者を取り巻く疾患には、糖尿病、高血圧、認知症、骨粗鬆症、ロコモティブシンドローム、慢性腎臓病、慢性呼吸器疾患、排尿障害など様々あり、これらの症候を注意深く観ていかなければなりません。また、高齢者の中には治療をただで帰宅させても、同様の原因で、再度、救急搬入・入院を繰り返す事例が多く見られます。老年医療は、退院後のケアにも力を入れ、積極的に暮らしを見てもわる地域包括ケアにつなげる

必要があると考え、現在、在宅診療を30名ほど行い、この繰り返される退院後の病状悪化をくい止めています。さらに、町民が住み慣れた町で「最期まで自分らしく生ききる」ことを目標に、地域包括ケアから看取りまでの医療を実践しています。この看取りまでの医療に必要なものとして、事前指示書(AD: advance care planning)があります。簡単に言うと、病惱期から終末期に向けて意思決定が低下した場合に「個人が希望する医療の申し送り書」です。天塩町で使用している事前指示書には、

1. 最後に迎える場所(病院・自宅・施設・症状に応じて)
2. 自分で食べられなくなった時の希望
3. 心肺停止の場合の希望
4. ご自分で意思表示ができなくなった時、主治医が相談すべき方は誰か?

などの項目があります。この事前指示書を含めて、その人らしい生き方を全うするためにその患者さんと係わりあう専門スタッフが情報共有と連携をして、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)を行います。※ ACP:一言で言



うと、「もしもの時の話し合い」。当町で事前指示書を提出されている方は70名おり、この方々全員にアドバンス・ケア・プランニングが行われています。この2年間で看取られた方は、ご自宅が3名、特老施設で3名です。天塩町では年間50名前後の方がお亡くなりになるので、2年間で看取られた方は、まだ6名と多くはありません。

7. おわりに

最近行われた町民へのアンケートの回答から、いつまでも町内に住み続けたいと思う町民が非常に多いことが分かりました。長年住み続けているご高齢者の方のみならず、町内の若者も意外に都会志向ではなく町内での生活を希望さ

れていました。将来にわたり、町民のこの願いを叶えていくには、町の医療は電気・ガス・水道と同等のライフラインである認識にたち、必要な医療の環境整備と検診等の受診をしっかりと勧め、町民の健康を守っていく必要性を感じています。

当院のように町内唯一の病院がもつ強みは、町民にとって一番近くにある病院だからこそ、慣れひたしんだ町で暮らし続けたいと願う町民にいつも寄り添える立ち位置にいます。それ故、地域と共に安心して看取りまでできるような医療をつくっていくことが、町内唯一の病院が果たしていく役割であると考えています。